解説「旭堂南海さんについて」

藤沢　毅

本学日本文学会主催の二〇一〇年度「文学三昧」において、上方講談師・旭堂南海（きょくどうなんかい）氏（以下、南海さんと呼ばせていただく）をお招きして、講談「げんこつ和尚」を読んでいただいた（落語は「ハナス」、浄瑠璃は「カタル」、長唄は「ウタウ」、そして講談は「ヨム」なのだ）。

南海さんは一九八九年、三代目旭堂南陵氏に弟子入りした上方の講談師である。一九九八年には大阪市より「咲くやこの花賞」を受賞、二〇〇九年には加古川観光協会より、「加古川観光大使」に任命されている。現在は、講談続き読みの「旭堂南海の何回続く会」ほかの講談会、さらにテレビ、ラジオに出演、また多彩な執筆活動をもしている。

私が南海さんを知ったのは、近世文学研究者として実録を研究している、大阪大谷大学の高橋圭一氏を通じてである。実録というジャンルは近世文学の中でもこれまであまり研究対象とされてこなかった。その理由として、写本であること（版本より読みにくい、読むのに時間がかかる）、本文が流動するという性格を持ち、しかも諸本がたくさん現存していること（ある程度までは諸本を比較検討しなければならない）、内容が通俗的なエンターテイメントであること、などが挙げられる。この実録の中で特に戦記ものを通俗軍書と言う（代表的なものとして、分量的にとても長く、そして貸本屋を通じて大変多く読まれた作品『太閤真顕記』『真田三代記』がある）。例えば高橋さんは、大坂の陣を扱った徳川贔屓の通俗軍書『難波戦記』、そこから生まれたと思われる大坂贔屓の『厭蝕太平楽記』、さらに真田家の話として昌幸、幸村の活躍を描くという形で虚構性が強まった『真田三代

記』、それをまた水増しして長編化させた『本朝盛衰記』のそれぞれの複数テキストを丹念に読み込み、テキスト間の変遷、また『通俗三国志』（これは実録ではなく、刊行されたもの。『三国志演義』の翻訳）からの取り込みなどを追跡したことがある。[注1] これがどれだけ膨大な作業を必要としたかは言うまでもない。この『通俗三国志』や大坂の陣の戦記は、近世期から講談で盛んに読まれていた。現代にまで繋がる講談の大坂の陣ものと、これら通俗軍書の関係は深い（現代の上方講談「難波戦記」は、『厭蝕太平楽記』に一番類似するそうである）。同じ大阪に住む高橋さんと南海さんはこうした面から繋がりを持ち、お互いにそれぞれの専門知識を交換していた。私も僅かながらこうした実録研究に足を踏み込んできたところであり、高橋さんから紹介され、南海さんに自分の論文や翻刻を送っていたのだ。

私にとって講談との関わりは別の所からもあった。尾道大学に赴任して、尾道を切口にした学問「尾道学」を始めることになり、とは言っても尾道を舞台にした近世文学は少なく、困ったあげく考えついたのが、尾道済法寺の住職であった拳骨和尚こと物外不遷の講談である。拳骨和尚の講談は、明治四二～四三年にかけて大阪の此村欽英堂から出版された、いわゆる書き講談の『名誉拳骨物外和尚』『怪力無双拳骨和尚』『豪僧拳骨後の物外和尚』の三部作が代表であり、これら書き講談から、さまざまな拳骨和尚ものの小説が生まれ、また現代では津本陽による『拳豪伝』が著名なものとなっている。[注2] 読本、実録といった、言ってみれば近世のエンターテイメントを専門としている私にとってみれば、こうした講談における虚構化はたいへん興味深く読めた。

「文学三昧」の講演講師選定にあたり、尾道→拳骨和尚→講談→南海さんと結びつき、お願いすることが可能か、動きだすことになった。しかし、ご本人の講談を聞いてもいないのに、いきなり講談のお願いというのも失礼なものであろう。実はこれまでテレビを通して以外は講談を聞いたことがなかった私は、この機会に大阪に講談を聞きに行こうと決心した。ところが、この講談、いつどこでやっているのか、意外に情報が入りにくい。インターネットでは、逐一の公演情報が検索できないのだ。それでもなんとか、南海さんが石山合戦記における「鈴木飛騨守」を読む会がある、ということを知り、ついに二〇一〇年二月二三日、大阪に乗り込むこととなる。

場所は大阪、地下鉄「谷町六丁目」駅近くの薬業年金会館の五階和室。「鈴木飛騨守」というのは、信長と石山本願寺の戦において、本願寺側の軍師となった智将のことである。実在しない、虚構の人物であり、いつから、どこから生まれたかまでは定かではないが、立耳軒作の

通俗軍書『石山軍鑑』に登場し、この写本の流通によって著名になる。私はこの立耳軒作の通俗軍書に多大な興味を抱き研究対象としていることからも、非常に楽しみにして大阪へ向かった。午後七時からということで、宿を確保し、会場に向かう。ところが、会場につくと、そこには「緊急割り込み企画！　凱旋記念　惟納（ウィーン）公演報告大会」というチラシが貼ってあった。内容が急遽変更されていたのである。「なんだ、これは？」と思いながらも和室の会場に入り、座布団を敷き座り込んで待つ。中高年を中心としたお客が徐々に集まり、ほぼ満員状態になる。そして開演。まずは第一部「惟納（ウィーン）公演報告書生節大会」。南海さんとともに宮村群時さん（ロックミュージシャン）が、ともに袴に高下駄、学生帽といういでたちで、バイオリンを持って登場。バイオリンを弾きながら、歌うのである。これは書生節といって、元々は明治から大正に流行したストリートライブであり、「パイノパイノパイ」のフレーズで流行した「東京節」などは記憶にある方もいるだろう。これを南海さん、宮村さんが復活させ、上方書生節として何度かのライブを行い、さらにはウィーン大学より招聘され、同大学とウィーン民族学博物館で公演をしたきたとのこと。今回の内容は、そのウィーン公演の様をメインに据えておもしろおかしく語り、その他社会諷刺（詳しい内容は文章にできないが、大阪の…）等を二人の掛け合いの漫才のようなもので笑わせ、そして歌うのである。なんかよくわからないけどすごいのだ。第二部は、いよいよ南海さんの講談、ウィーン公演にちなんで「維納（ウィーン）の辻音楽師」が読まれた。迫力があり、おもしろい。まさに「プロの技」である。公演終了後、控え室に南海さんを尋ね、とりあえず御挨拶だけでその日は退散する。

次は、同年三月に大阪文化再発見事業としてさいかくホールで行われた「講談から探る大阪人の心意気」（全3回シリーズ）に参加。第一回は「だんじりに彫られた難波戦記」、第二回は「大坂の陣の文学と講談」、第三回は「真田幸村と大坂の陣」。それぞれの会の講師が南海さんと講演をし、その後、南海さんが講談を読むという構成。三回目終了後、南海さんと、第二回の講師を務めた高橋圭一さん、第三回の講師を務めた大阪城天守閣学芸員の北川央さんとともに一杯飲もうかということになった。

ここでもう一つ印象に残る話を紹介しよう。会場で配布された講談公演のチラシに次のような文章が載っていた。

…北海というのは、連日亭で毎回トリとして出演している。色が浅黒く眼がギョロとして、右足をい

つも引きずっている。これは酒に酔った際、地下鉄の駅で北海が「俺の右ひざは鋼鉄の様な硬さをしてるんや」と叫び構内の壁に飛び膝蹴りをし、予想以上の痛みにそのまま線路に転落。

たまたま居合わせた電車を待っている乗客の必死の活躍で助け出されたという逸話を持っている。

（南青太郎「鶴橋毎日物語」第一〇八回、より）

「北海」というのは当然「南海」のもじりである。これを読んだ私は単純にも「ああ、私の同志だ。ここにも酒で失敗した人がいる！」思い、飲み会の席ですぐに、（ニヤニヤしながら）「こんな逸話があるんですって」と話を向けた。ところが、実のところを聞いてみると、南海さんは、見知らぬ酔客が線路に落ちたのを救出した側であり、膝はその際の名誉（？）の負傷なのであった。こうした自らの美談でもあり不幸でもある体験を、弟弟子筋の人間がすぐに笑いに替えてしまう点、これがすごいところである。

こうしてまた少し南海さんとお近づきになった私は、メールにて「文学三昧」出演の交渉を開始。そしてご快諾をいただけたのである。その後も、細かい打ち合わせをメールで重ね、いよいよ当日となった。「文学三昧」のトリを飾り、南海さんの出番。私が舞台に上がり、南海さんの紹介。そしてお囃子とともに南海さん登場。ここから後はもう述べるまでもない。迫力たっぷりの拳骨和尚が読まれたのであった。多分、講談を生で聞いたのが始めてという人も多かったのであろうが、その話芸のすばらしさは十分感じとれたのではないかと思う。客席には拳骨和尚が住職を勤めていた済法寺関係の方も多く見られ、そちらのご興味からもご満足していただけたかと思われる。済法寺事務局長は楽屋に南海さんに挨拶に行かれていた。

その後の懇親会にまでお付き合いしていただいた南海さん。学生とも気軽に話をしていただき、最後の最後までプロとして振る舞ってくださった。何度感謝申し上げても足りないくらいである。そうだ。今度、学生を連れて大阪に講談を聞きに行くツアーを組もう。日本の伝統芸能の一つとして、そして偉大なエンターテイメントとして、南海さんの講談は高く評価されるべきである。

なお、南海さんの講談「げんこつ和尚」は、以下、テープ起こしの形でご紹介する。

注

（1）高橋圭一「実録『厭蝕太平楽記』『本朝盛衰記』と『通俗三国志』（『近世文芸』89、二〇〇九年一月）に詳述。また、高橋さんの実録研究は『実録研究』（二〇〇二年、清文堂）、『大坂城の男たち』（二〇一一年、岩波書店）に詳しい。ちなみに、高橋さんは尾道短期大学に勤務していた時期がある。

（2）拙稿「講談本の中の拳骨和尚」（『尾道大学地域総合センター叢書1「尾道の芸術文化」』所収。二〇〇七年一〇月）に述べた。

（補記）なお、南海さんは大阪大学（国文学科）時代、光原先生とほぼ同期であり（英文学科）、同じキャンパスですれ違ったりしていたのだろうということがわかった。

—ふじさわ・たけし　尾道大学日本文学科教授—